

太平記に現われた菊池氏

——その史実と文学性について——

一 はじめに

これまで、太平記はしばしば史実との関係において論ぜられて来た。その場合、史実を太平記の作者がどのように受けとめたか、つまり、史実がそのまま太平記に生かされたか、又は、改変して別な趣のもとに構成されたかのいずれかによって、二つの研究対象が生まれてくる。前者は史料としての価値の問題であり、後者は小説・創作の観点から見た文学の問題である。そして、実際においては、文学であるとともに史書の性格を帯びているというのがこれまでの大方の見解であった。それなら、菊池氏と太平記の場合はどうか。

ここで論究する菊池氏は肥後の菊池を本拠とする一地方豪族である。中世軍記物語に菊池氏が登場するのは、「保元物語」をもって最初とする。しかし、そこでは鎮西八郎為朝が類なき剛の者であることを説明するに際し、「十三の年より豊後国に居住して、阿蘇平四郎忠景がむこになりて、九国をなびけんとするに、誰かはさうなく随ふべき。菊池・原田を始として所々城をかまへ、国々に引こもりてンげり。」(傍点引用者、以下同じ)と名前のみを記すに留まる。又、平家物語、源平盛衰記、義経記における菊池隆直も、そこに登場する多くの地方武士の一人として描かれるのみで戦いの中心的人物とはなり得なかった。

しかしながら、太平記になると、菊池氏の活躍の場は俄に開かれ、楠、新田、足利等の中央の諸武将との比較は別として、九州を中心にした戦いにあつては、菊池氏を抜きにしては語ることが出来ないといつて

も過言ではない。

太平記全四十巻に登場する菊池一族の氏名(但し、単に「菊池」という漠然とした表現も含めて)を抽出してみると、十三巻、二十六項目に延べ三十七回を数えることが出来る。このうち、特に菊池氏の合戦の模様を伝えるのは、次の六項目である。

卷 十一 筑紫合戦事

卷 十六 小貳与三菊池合戦事

多々良浜合戦事

卷 三十三 菊池合戦事

卷 三十六 付菊池軍事

卷 三十八 菊池大友軍事

ここでは、これらのうち主として武時、武重、武敏の登場する卷十一、卷十六について論を進めて行く。尚、太平記からの引用は岩波日本古典文学大系本A底本、慶長八年古活字本Vによった。又、その他史料を引用する場合、異体の文字は改め、適宜句読点を施した。

二 「筑紫合戦事」と菊池武時(一)

太平記卷十一は、北条氏が完全に滅んだ後、王政が復古し、高(尊)氏、義貞、正成等に迎えられ、後醍醐天皇が都に還幸される元弘三年の頃を中心に描かれる。丁度、この巻の半ばに位置する「筑紫合戦事」は元弘三年三月十三日のことであり、年代的に見れば、卷八「三月十二日合戦事」(京で赤松勢と六波羅との合戦)の後あたりに来るべき合戦で

蟹 江 秀 明

あるが、「筑紫合戦」の冒頭にも書かれているように、京都、鎌倉が既に静まって、今は筑紫の探題英時を討つのみとなり、師基を下向させようとした丁度その時、菊池、小武、大友のもとから早馬が来て、九州の朝敵を退治した由伝えた、というところから筆を起した回想形式で物語が展開して行くのである。

まず菊池武時が挙兵した元弘三年三月頃の中央の情勢を記しておく。

閏二月一日に吉野が陥り、正成の籠った千早城の周囲には、北条方の関東勢がとり囲み、義貞は綸旨を受けてようやく官軍として兵を挙げようとしたところである。後醍醐天皇の隠岐脱出もこの頃（太平記には「三月二十三日」とあるが、皇年代略記、増鏡などの「元弘三年閏二月二十四日」が正しい）であった。

この時、九州では未だ探題北条修理亮英時の力が強かった。太平記巻一「後醍醐天皇御治世事付武家繁昌事」には

（承久）

同三年ニ、始テ洛中ニ兩人ノ一族ヲ居テ、兩六波羅ト号シテ、西國ノ沙汰ヲ執行セ、京都ノ警衛ニ備ラル。又永仁元年ヨリ、鎮西ニ一人ノ探題ヲ下シ、九州ノ成敗ヲ司シメ、異賊襲來ノ守ヲ堅ス。

とあり、卷三十三の「公家武家榮枯易レ地事」には

（北朝の武家の）其權威只古ノ六波羅・九州ノ探題ノ如シ。

と見える。これらからもわかるように、九州探題は六波羅と共に、鎌倉時代に作られた重要な地方政治の要だったのであり、その任には、代々北条一族が当たっていた。

当時、九州には、小武、大友（伴）、島津の三大豪族がいた。これに比べ、菊池氏の勢力は菊池郡を中心に山本、玉名（玉名の一部は小代氏所有）の肥後北部に限られた狭範囲であった。

このような情勢下で、菊池氏が蹶然として探題英時の前に立ち上ったのは何故であつたろうか。太平記はその間の事情を次の如く述べている。

主上未ダ舟上ニ御座有シ時、小貳入道妙慧大伴入道具簡、菊池入道寂阿、三人同心シテ、御方ニ可レ參由ヲ申入ケル間、則綸旨ニ錦ノ御旗ヲ副テゾ被レ下ケル。

即ち、主上（後醍醐天皇）の綸旨を受けたことに、直接の原因があつたというのである。もともと後醍醐天皇の隠岐脱出が閏二月二十四日であり、武時戦死の三月十三日迄わずか二十日たらずしかないので、綸旨を受けるのは不可能だとし、護良親王からの令旨であろうとする考えもある（2）。この時の綸旨が令旨が現存しない以上、断定は出来ないが、唯、菊池氏の系譜及び累代の戦功を知ろうとする場合の根本史料の一つである「菊池武朝申状」（3）に

後醍醐天皇御時元弘三年者會祖父武時入道寂阿。忝奉勅詔。同三月十三日打入凶徒將平英時之陣。

とあり、又、「筑紫合戦」に関する史料である「博多日記」（4）には

○寂阿ガ筑州江州ニ立ニ使者ニ申云。宣旨使ニ罷向候、總可レ有ニ御向ニ之由觸廻ル。

○菊池棒ニ錦旗、松原口辻堂ヨリ、御所ニ押寄之處……宣旨ノ御使ヒ、人々參テ可レ付ニ着到ニ之由ノシリテ櫛田濱口ニ打出。

とあることから、綸旨と考えることが可能である。その綸旨と錦旗が武時のもとへ下賜されたものと思われる。そして、これは、菊池にのみならず、太平記にもいうように、小武、大友のもとへも届いたであろう。なぜなら、歴代の九州探題が北条氏の子孫によって受け継がれていた

為、これら九州豪族の勢力は衰微の一途にあり、彼等が少なからぬ不満を抱いていたことを、天皇方もおそらく見抜いていたと思われるからである。

太平記に記述されたところによると、英時は綸旨に対する諸將の動きを逸早く嗅ぎつけ、その野心の実否を打診する意味で彼等を探題に呼びつけたのだが、その第一番目が武時（法名寂阿）であった。その時、彼は隠謀が露見したと察し、むしろ、自分の方から先に探題へ打寄せようと決意する。そして、日頃の約束通り、小武と大友へ共闘を申し出る。ところが、大友は、天下の情勢が北条方か天皇方のいずれに落着くかを見定められず、すぐ応諾しないし、小武は、この頃、六波羅勝利の報に接したので、武時を裏切り、その使者の頸を落して探題へ供するのだった。そこで彼は怒り「日本一ノ不當人共ヲ憑デ、此一大事ヲ思立ケルコソ越度ナレ。ヨシヨシ其人々ノ與セヌ軍ハヤラヌカ」と孤軍、兵を挙げることになる。

博多日記は武時の挙兵について次の如く記録している。

正慶二年三月十一日、肥後國菊池二郎入道寂阿、博多ニ付畢。同十二日出仕之時、遲參候間、不_レ可_レ付_二着到_一之由、侍所下廣田新左衛門尉問答之間、及_二口論_一畢。同十三日寅時博多中所々ニ付_レ火燒拂。寂阿ガ筑州江州ニ立_二使者_一申云。宣旨使ニ罷向候、總可_レ有_二御向_一之由觸廻ル。筑後入道殿ハ、堅糟ニテ、此使ニ人ガ頸ヲ切、十三日夕方被_レ進_二匠作方_一。江州ハ可_二打止_一之由被_レ仰之間、彼使逐電畢。

こうしてみると、十二日に武時が探題へ出仕した時、到着が遅れたという理由で叱責され、口論となつてゐることは、英時が武時を呼び寄せようとした真意が、綸旨を賜った菊池の出方を見るよりも、最初からこの邪魔者を斬ろうとする気持が強かつたのではないかと想像される。又、武時は最初あくまでも、かねての約束通り小武、大友を誘い三者一体と

なつて探題を攻める心算だったが両者に裏切られたことがはっきりしてくる。

挙兵の日時を見るに、博多日記では、火を付けたのが「十三日寅時」というし、太平記には「元弘三年三月十三日卯時（午前六時頃）」とある。勿論正慶二年は南朝の元弘三年であるから、両書の時間が二時間ずれているだけで、これに関する限り疑う余地もない。しかも、太平記の方には博多の街に火を付けたという記事がないのであるから、火を付けた後に探題邸へ攻め込んだのが卯刻であることも可能であろう。こうしてみると、太平記の記述は大筋において博多日記の記録と一致していることがわかる(5)。

菊池軍が探題館へ向おうとするところで、太平記は短い挿話をさし狭む。

武時が「櫛田ノ宮」の前を過ぎようとした時、乗っていた馬が竦んでしまった。そこで彼は大いに怒り、鎗矢二矢を神殿の扉に向つて射た。すると馬はすぐ動き出した。後でその社壇を見ると、二丈ばかりの大蛇が鎗矢に当つて死んでいた、というのである(6)。

一体、この挿話にはどれほどの真実性を認めてよいのだろうか。従来この部分については、「櫛田神社と探題館とを見誤った」「見誤るはずがないから太平記の記事が正しい」という見方が対立している。前者は、神社に矢を射るなどとは考えられないから、多分「蟻通明神」の故事（枕草子二百四十四段、貫之集十雜部に見える）になつたもの(7)か、あるいは敵の不在の邸宅に鎗矢を射て出陣するという故事によつたもの(8)であろうというのである。後者では、博多にこれまで何度も行つたことのある武時が間違はずがなく、むしろ、一刻を争う合戦にのぞみ、もはや神への礼儀にも拘泥せず、部下の志気をひきしめるためにあえて鎗矢を射た(9)という説がある。ここで、博多日記を見るに、勿論このような挿話は入っていない。しかし、注目すべき一文が記録されている。

一凡今度合戦ニ不思議事アリ。炎御所ニ懸り、既、アブナク見ケル所、御所中ニ光物出来、煙中ニ白鳩ニ飛來ト見ケル程ニ、本ノ風ハ西風ニテアリケルガ、ニワカニコチ風ニ吹ナリテ、御所不_レ燒。爰、菊池旗サシ、錦旗ヲウチステ顛畢。菊池モ旗指ヲ失テ仰天ス。其上自_三櫛田濱口_一打入、櫛田宮此ハ御所カト云テ、二三度宮ヲ打廻。即人二人打クロス。サテ御所ニハ、大手ハ寄タルカト人ヲ以テミセケレバ、使者返テ「サル事モ候ハズ」ト申ケレバ、腹ヲ立テ御所ニ打寄ケル。神罰ヲ蒙カト被露アリ。

ここには、先の挿話と一脈通じるところがある。即ち、風の方向が變つて、御所が焼けなかったという十分想像し得る自然現象に対し、そこが御所であったことから、合戦後人々の話題にのぼる際、煙中に白鳩が現われて神を守ったという風に創作され、ひろまっていたものと想像される。何か良い結果を予期させる時、白鳩が現われるという語り口は、太平記の中でも度々みられるところであり(卷九「高氏被_レ籠_三願書於篠村八幡宮_二事_一」、卷十六「將軍自_三筑紫_二御上洛事付瑞夢_二事_一」⁽¹⁰⁾)。これらから考え合わせる時、鳩の出現を抜きにすれば、かなりこの記述の真实性を認めてもよいであろう。そうしてみると、櫛田浜口から討入った武時は夜だった為、櫛田神社を探題館と見誤ったのであろう。そして、その廻りを二三度駆け廻って、二三人(おそらくは神社に係した人であろう)をうち殺してしまつたものと思われる。「太平記」の挿話はこの辺りから生まれて来たフィクションではなからうか。このことがやがて合戦終了後の巷にひろまっていって、そんな無礼なことをしたから神罰が当って、武時は敗れたのだ_〃という噂が流れ始めたのだらう。博多日記の「神罰ヲ蒙カト被露アリ」という末尾の一文がそれを想像させてくれるのである。そして又、こういう風説を耳にし、且つ、武時の「義ヲ金石ニ類シテ、責戦」った武勇に心を打たれる太平記の作者は、武時のその忠誠と戦功をより大きく表現する為に、探題へ向う途中の物語にこのようなフィクションを入れたものと思われる。だが、「蟻通明

神」の故事(蟻通明神の前で、馬が病み倒れるので、祈念して無事通過する)や、不在の敵邸宅に鎬矢を射て出陣するという故事(太平記卷十四「節度使下向事」には、建武二年宣旨を受けた義貞が鎌倉へ尊氏征伐に向かうに当り、かつて、平正盛が宣旨を受け義親征伐に行く時、義親の留守宅に鎬矢を射込んで出陣したことになみ、尊氏の留守宅に鎬矢を射込んで出陣する)など類似の記述も多いことを考えると、これをもつて特異な挿話とすることは出来ない。

意気揚る菊池軍は小勢ではあるがその気概ははるかに英時防禦軍を凌いでいた。博多日記によれば

サテ御所ニ打寄、及_三合戦_一。菊池入道、子息三郎、二人ハ犬射馬場ニテ被_レ討。菊池舍弟二郎三郎入道覺勝以下若黨等、打_二入御所中_一、既ニ御壺ニ責入、致_三合戦_二之間、敵七十餘人被_二打止_一畢。

菊池嫡子二郎并阿蘇大宮司ハ落畢。

簡略ではあるが、この記録から武時(菊池入道)が犬射馬場で討死したことがわかる。但し太平記は、この武時の死に先立ち劇的な武重との訣別の場面を記す。

探題攻撃が小武、大友の裏切りにより、菊池軍の単独行動になった為、武時は苦況に陥り、いよいよこれを最後と思う時、嫡子武重を呼び、自分の死後「汝ハ急我館へ歸テ、城ヲ堅シ兵ヲ起シテ、我が生前ノ恨ヲ死後ニ報ゼヨ」と促し、父と諸共に討死する決意の武重に「汝ヲバ天下ノ為ニ留ルゾ」と諭すのである。やがて武重は五十余騎を率いて肥後へ帰って行く。

ここで想起されるのは、かの楠正成が湊川の合戦を前に桜井の宿で正行と訣別した太平記卷十六「正成下_三向兵庫_二事_一」である。この時、正成は十一歳の嫡子正行に、自分がここで討死すれば、天下は將軍の代に成るだらうが、降人になるようなことはするな「一族若黨ノ一人モ死殘テアラン程ハ、金剛山ノ邊ニ引籠テ敵寄來ラバ命ヲ養由ガ矢サキニ懸テ義

ヲ紀信ガ忠ニ比スベシ。是ヲ汝ガ第一ノ孝行ナランズル」と庭訓を残し正行を河内国に帰らしめる。

語る言葉こそ違え、己れは最後まで天皇方として戦い抜こうと決意しながらも、嫡子には、武将の最も重んじた家系を継ぎ貫かせ、又、自分の死後にはその恨みを晴らせようとする共通の心情がある。あまりにも劇的な桜井の遺訓の場面が史実にはないフィクションであるという説があるように、武時の場合も博多日記を始め信すべき記録のどこにもそれらしき記録のないことから、これも又、太平記の作者の作為と考えられる。同時に武時の行為を楠のそれと匹敵するものにみようとした作者の意図も伺い知れる。そのことは、とりもなおさず菊池の活躍が常に中央においても伝聞されていたことを意味するであろう。菊池武朝申状は、元弘三年三月十三日に戦死した武時のことを述べた後、次の如く記している。

然者元弘一統之頃。義貞、正成、長年令_二出仕_一之日如_二正成言上_一者、元弘忠烈者勞功之輩雖_二惟多_一。何存_二身命_一者也、獨依_二勅諭_一墜_二一命_一者武時入道也。忠厚尤爲_二第一歟云々。此條達_二叡聽_一之由。世以無_二其隱_一者也。

即ち、楠正成が、建武中興を成すにあたつて最も武功のあったのは武時であると推しているのであるが、このような菊池氏の譽れの噂は時を経て太平記作者の耳にも当然入っていたものと思われる。又、「正成兄弟討死事」(巻十六)で、正成、正季の兄弟が差し違ひに自害するに至つた時、武重の命で合戦の次第を伺ひに來た菊池七郎が共に自害するといふ一文(後に武重のところで詳述)を、楠の宗徒の自害とは別に、あえて一行をさいて記したのも、作者が菊池に対して一方ならぬ関心を示したものとえよう。ともあれ、桜井の別れが建武三(一三三六)年五月二十四日であり、これより三年早い元弘三(一二三三)年三月十三日に、既に武時、武重の訣別場面が記述されていることは注目すべきことであ

ろう。いうまでもなく太平記作者の態度が、楠、新田、足利といった中央の巨將達に重きをおいていることを考える時、菊池親子の訣別が、やがて巻十六における正成、正行(先の桜井の宿で別れた正行は「正成首送_二故郷_一」において、尊氏から送られて來た父正成の首を見、悲歎のあまり自殺しようとするが、母の教訓によって思いとどまり、幼心ながら、尊氏討伐を心に誓う)の感動的挿話を導き出す伏線になっていると思われる。

太平記はその後、武時が一首の歌を袖の笠符_{かまじるし}に書いて武重に持ち帰らせ、次男肥後三郎と共に、百余騎を前後に立てて探題邸を攻め討死するところで菊池関係の記述を終る。武時の死亡年令については從來、諸説がある(11)。大要、四十二、五十三、六十二歳の三説が考えられるが、武時を武房四十八歳の時の孫とすることは可能であり、更には異本系図(「肥後古記集覽」所収)に武時の辞世歌として、

四十ぢあまり二とせまては詠きぬ花やあるじと我を待つらん

とある。この歌自体は後世の偽作として疑うべき点もあるが、死亡年令のみを考えると太平記にも武重が「四十有餘ノ獨ノ親……」(巻十一)と語っていることでもあるし、四十二歳死亡をもって最も妥当と思われる。

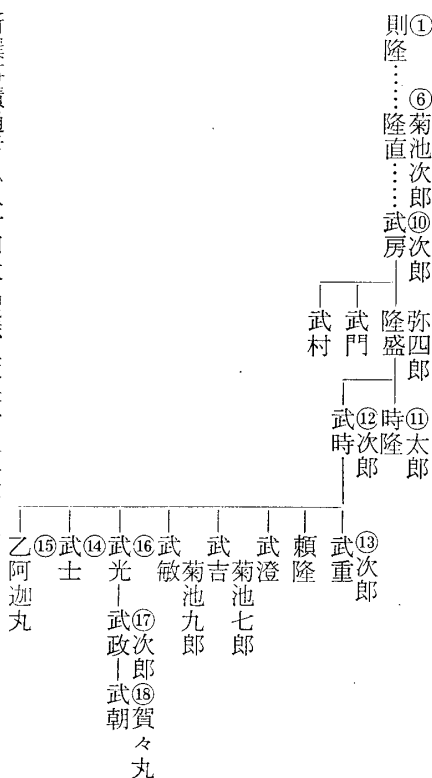
ところで太平記で、武時と共に討死したことになる「二男肥後ノ三郎」とは一体誰のことであろうか。菊池氏系図のいづれを見ても、博多で討死したのは三男頼隆となっている。従つて、太平記の二男は明らかに誤りであろう。この頼隆に関しては、博多日記にその妻のことが長いエピソードとして伝えられている。しかしそれはもはや太平記とは関係のないところである。又、その他、博多日記には武時の死後、規矩掃助高政を大将とした探題方が肥後の菊池・阿蘇両氏を討ち、三十二人の生捕を率いて博多へ帰るまでの記録や、一人の比丘尼の話、備後鞆の津で菊池の家臣が敵に会い、密書を焼きすてて割腹したことなどを書き

とどめ、四月七日の記録をもって終っている。

かくして、太平記の菊池武時に関する「筑紫合戦事」は、大筋において博多日記に記録されたような史実に従いつつ、それを物語化していったものといえることが出来る。

註

- (1) 菊池氏略系図(菊池総系図より本論に必要な部分のみ抽出した)



- (2) 新撰事蹟通考(八十田政名撰、天保十二年成立。肥後文獻叢書第三卷所収)巻之十三。
- (3) 弘和四(一三八四)年七月、反對派の讒構が吉野朝廷で受け入れられそうになった時、それを弁明する為、当主武朝が提出した漢文の具申書である。(群書類従、合戦部所収)
- (4) 東福寺の僧良覚が東福寺肥前国彼杵庄重要目録の裏面に書いた元弘戦乱の見聞記で、一三三三(元弘三・正慶二)年三月十一日から四月七日に至る、九州・中国・四国方面における菊池氏の行動などを記したものである。原本は元禄時代に東福寺から加賀藩主前田綱紀の手に渡り、現在尊経閣に所蔵。尚、この良覚は、鎌倉幕府の下知を仰いだ人であるから、年号も正慶を用い、後醍醐天皇を先帝と称している。記録が詳細で、巷間の噂などもよく記しているところから博多合戦当時、おそらく良覚は博多に滞在していたものと思われる。
- (5) この他、太平記に記された菊池の軍勢と博多日記の記録が一致することは拙稿「太平記に於ける菊池氏」(中央大学国文第七号)において論証した。
- (6) 天正本太平記の記述はかなり違っている。

- (7) 久米邦武氏「太平記は史学に益なし」
高木 武氏「太平記の史実について」
植田 均氏「純忠菊池史乘」
(8) 平泉 澄氏「菊池勤王史」
(9) 難太平記「尊氏直義産湯時有り奇瑞二事」にも山鳩が奇瑞をもたらすとい
う記述がある。
(10) ○「新撰事蹟通考」卷十三。十三日武時督餘兵一冒陣死年六十二
(11) (武期申状、太平記菊池傳記年六十二據異本系図)
○「参考太平記」菊池家譜云・寂阿討死時四十二歳

三 中央における武重

菊池氏を語る場合、その中心的人物は武時とその子武重、武光の三人である。特に武重は一族統合や中央政局との関係における手腕は菊池氏歴代の頭首のうち最たる人物であつた。しかし、太平記に登場する限りで見ると、武時や武光のように菊池氏の戦況を伝える一項を設けた中でその活躍が記されるといふようなことはない。卷十一、十二、十四、十六、十七を通して随所に武重の名前を見出し得るものの、それはあくまで断片的記録に過ぎない。ここでは、それらの断片を隈無く拔出することによつて、武重と中央政局との係わりを述べることにする。

武重が博多で父武時の庭訓を受け帰館して後、太平記に菊池の名前を見出すのは卷十二の「安鎮国家法事付諸大將思賞事」においてである。建武中興成った京の街へ、各地の武士達が続々集つて来「自筑紫・小貳・大友・菊池・松浦ノ者共、大船七百餘艘ニテ」参洛したのだった。

この時、抽賞が行なわれた中で、足利尊氏、新田義貞、楠正成などに混って武重も恩賞を受けたことは太平記の記述を始め、先に見た菊池武朝申状における楠正成の発言「獨依勅詔一命二者武時入道也。忠厚尤爲第一一歟云々。」によつても推察されるところである。

建武中興が成り、安定したかに見えた中央政局も、やがて公武間の不一致で相互に利害の対立が生じる。護良親王を失脚させた尊氏は新田義貞と激しく対立し、ここに五十七年間にわたる南北兩朝分立の端を発することとなる。その間にあって、武重は建武二年十一月、宣旨を受けて鎌倉へ尊氏討伐に下向する義貞軍の中に名を連ね（太平記卷十四「節度使下向事」、次で、義貞軍が直義軍と箱根に對陣した時「菊池肥後守武重、箱根軍ノ先懸シテ、敵三千餘騎ヲ遙ノ峯ヘ卷上ゲ、坂中ニ楯ヲ突雙テ、一息繼テ咏ヘタリ。」）「箱根竹下合戦事」という奮戦ぶりであった。この箱根先陣には後日、伝説めいたエピソードが残る。即ち、武重は手兵千人に命じて青竹の先に小刀をつけ槍隊を編成して直義軍を撃退せしめたという。これが菊池千本槍のはじまりであるが、このことは「太平記」や「梅松論」などにも記されておらず、如何なる事情で語り継がれたものか察しづらい。唯、刀鍛冶菊池延寿の造ったと見られる延元、興国、正平などと銘記された槍が菊池神社等に現存しており、又、槍戦法が南北朝に始った集団戦法の発達と関係あるものと思われるので（1）、千本槍の伝説も根拠なしとしない。竹下合戦は、尊氏軍が尊良親王・脇屋義助軍を圧した為、義貞はやむなく僅か百騎をもって退却することとなる。そして、この小勢に馳せ加わって共に西下した中に「鷹ノ羽ノ旗一流指シ揚テ、菊池肥後守武重、三百餘騎」もいたのである。

箱根から退却した菊池氏は、義貞の下に延元元年正月攻め上ってくる足利軍勢を大渡で待った。この戦いで菊池武村（武房の子、武時の叔父）が戦死した（2）とも、武村の兄武門が戦死した（3）とも伝えられるが、太平記には、そのような記事はない。いずれにせよ、大渡の合戦で武重以下が奮戦した一端は推測することが出来る。

その後の戦況を記すと、十日の朝、山崎の防禦が破れるに及び足利勢が京都へ流れ込み、この大渡の合戦にも終止符が打たれ、後醍醐天皇は叡山にのがれる。まもなく、北畠顕家が義良親王を奉じ京都に攻め入り、天皇方は勢力をもちかえす。尊氏は丹波から兵庫へ逃げ、二月十二日赤松円心の勧めによって九州へ向って船出した。足利軍を九州で迎え

撃ったのは武重の弟武敏であったが、それについては後に詳述する。足利軍追討の綸旨を受けた義貞は病氣恢復後西国へ向け出発する。それに関連し、太平記卷十六「新田左中將被責赤松事」には次の如き一文がある。

後陣ノ勢ヲ待調ヘン爲ニ、播磨國賀古河ニ四五日逗留有ケル程ニ、宇都宮治部大輔公綱・紀伊常陸守・菊池次郎武季三千餘騎ニテ下著ス。

「菊池次郎武季」とは一体誰であろうか。全ての菊池系図（総系図系、異本系とも）に武季の名前はない。参考太平記は「菊池家譜無武季」と注し、日本古典文学大系の頭注（釜田氏原案、後藤氏点検完成）では「武時の二男武澄か」とある。しかし、私見ではこの武季は「武重」の誤記と思う。その理由は、（一）箱根合戦以来、新田義貞の下で合戦に参加していた武重は常に宇都宮氏と一緒にあったが、この義貞西下の場合も宇都宮と同時に「菊池」と記されており、更には以後白旗城、舟坂山の合戦においても同様である。（二）系図によると菊池家は六代隆直以後、家を継ぐ者に「次郎」と付けている。これから考えると、この時菊池次郎と呼ばれていたのは武重以外にいない。（日本古典文学大系の頭注は「次郎」をもって次男と考えている）（三）武澄に関する系図、古文書の中に、それらしき記録を見出すことは出来ない。

武重は西下に当り終始義貞と行動を共にするのであるが、まず赤松円心の白旗城を攻め、陥らないうちに義貞の勧めで山陽第一の難所といわれる舟坂山に向った。そして児嶋高德の謀略でここを破り、続いて福山城も攻落す。一方、その頃、足利軍は九州勢をひきつれ勢いを盛り返して上洛の途につく。その為、義貞は三石を捨て、舟坂を退き摂津まで引き下り、足利軍を迎え撃つことになった（太平記卷十六）。太平記はここで、味方軍を無事退去させるまで、舟坂の敵軍を支え打つ菊池の若党、源五、源六のことを伝える（「備中福山合戦事」）。

かくて、建武三年五月二十五日、湊川において義貞、正成を始め天皇方と足利軍の激突となる。この時武重も力戦したと思われるが太平記には「新田殿湊河合戦事」に名前を連ねるに留まる。しかし、卷十六「正成兄弟討死事」の末尾には、武時の項でも触れた如く、菊池七郎の自刃の物語が伝えられる。

菊池七郎武朝ハ、兄ノ肥前守ガ使ニテ須磨口ノ合戦ノ體ヲ見ニ來リケルガ正成ガ腹ヲ切ル所ヘ行合テ、ヲメヲメシク見捨テハイカミ歸ルヘキト思ヒケルニヤ、同自害ヲシテ炎ノ中ニ臥ニケル。

「菊池七郎武朝」「兄肥前守」の両者とも明らかに間違いである（この場合の日本古典文学大系の頭注は正しい）。前者はいずれの系図においても（⁴）武重の弟「菊池七郎武吉」のことであり、武朝はこの時未だ生まれてもいないのである。後者も「肥後守」（⁵）の誤りで「武重」を指すことはいまでもない。

湊川の戦いが敗戦に帰すると後醍醐天皇は比叡山の東坂本へ臨幸となる。武重も多くの公家・武家と共に供奉し、東坂本においては義貞の弟脇屋義助の下で足利軍に防戦した。しかしこの臨幸に際して武重の名を留めるのは金勝院本太平記（存否不明の為、参考太平記による）のみである。延元元年（建武三年）十月十日天皇は尊氏の京都還幸を請う誓書に応じる。ここで武重は恒良・尊良両親王を奉じ越前に下ることになった義貞と別れ天皇の還幸に従う。太平記はこの時供奉者を「菊池肥後守武俊」と記す。タケトシと同名の人物に武敏がいるが、武敏はこの頃今川助時、一色範氏軍に追われ山中に逃げ込みながらも神出鬼没の活躍をしており、京に出て来たとは考えられず、又、武敏は「掃部助」でありこの時の「肥後守」は武重である。従って「武重」の誤記と思われる（⁶）。

一方尊氏は天皇が親王を全国に派遣して軍事的に抵抗すると察知するや神器を光明院へ譲り渡すよう強い、後醍醐天皇を花山院に幽閉し、供

奉した武士も囚禁してしまふ。その時武重はどうしたか。太平記卷十七「還幸供奉人々被禁殺事」には次の如く記述している。

可レストダニ知タラバ、義貞朝臣ト諸共ニ北国ヘ落テ、兎モ角モ、成ベカリケル者ヲト、後悔スレ共甲斐ゾナキ。十餘日ヲ經テ後、菊池肥後守ハ、警固ノ宥クアリケル隙ヲ得テ本國ヘ逃下リス。

このようにして、武重は肥後菊池へ向う。それは十月二十日（本朝通鑑「十月二十日壬」）前後のことであった。新撰事蹟通考卷六（「編年考徴四」）は菊池略傳によつて「尊氏與黨之兵堅守邊境武重至自豊後路賊兵要阿蘇險拒之武重及迫間某先卒而進擊賊衆散走武重遂還菊池」と記す。

肥後帰着後、武重は菊池氏の中心として一族の結束を固めると共に、対外的にも数々の戦果を残す活躍が続くのであるが（⁷）太平記には、中央より逃げ帰つて以後、全く武重の記事を見出すことは出来ない。南北朝の九州という限定された地域においては代表的一族であった菊池氏も、太平記作者が巨視的立場に立つてとらえようとする時、数多くの武将の一人としてしか考えられなくなる。そのことが度々武重の名を誤記したり、比較的旧形本とされる金勝院本に明記されていた名が、他の諸本において書きおとされる結果となったと思われる。

注

- (1) 杉本尚雄氏「菊池氏三代」（吉川弘文館、人物叢書）
- (2) 新撰事蹟通考卷十三「建武三年正月於三京大渡橋上戦死」
- (3) 藤原姓菊池系図異本（肥後古記集覧）「建武二年、武重参洛時於淀合戦討死」
- (4) ○武吉・七郎建武三年於攝州兵庫與楠正成共自殺（菊池総系図）
- (5) ○武吉・七郎楠正成ト同時ニ於兵庫討死（藤原姓菊池系図異本）
- (6) 広福寺文書（熊本県史料中世篇第一）延元三年八月十五日武茂起請文に武重のことを「舎兄肥後守子々孫々までいましめを定置れ候て……」とある。

(6) 参考太平記「金勝院本作武重、爲得、下倣之、按、菊池家譜云、肥

(7) 後守武重、從_レ帝在_ニ叡山、及_レ還_ニ幸京都、武重又供奉、
杉本尚雄氏「菊池氏三代」武重の項参照。

四 尊氏の筑紫下向と武敏

太平記卷十六は冒頭から足利軍の筑紫下向とそれに纏わる菊池武敏軍の合戦について記す。

尊氏が建武三年二月八日（梅松論「十二日」）神皇正統記「十三日」）兵庫を船出した時、率いる軍勢は僅かに五百人にも満たなかったという。船出の行程については「梅松論」（新校群書類従第十六卷、合戦部（一）所収）に詳しい。それによると、二月二十日に長門国赤馬（間）の関に着き、二十五日に小式頼尚兄弟等五百余騎の歓迎を受け、二十九日、再び乗船、翌日筑前国芦屋の津に上陸した。そして、三月朔日、頼尚を先陣にして宗像大宮司の宿所へ入った。

その手前、菊池武敏は、尊氏の九州入りを知ると肥後を発ち、尊氏討伐に向うのだが、この間の事情は太平記と梅松論ではかなり違っている。

太平記では、宗像の館に入った尊氏が宗継、光顕を両使として、小式方へ援軍を依頼し、これに応じて出陣しようとする小式頼尚を武敏は途中「水木ノ渡」で攻める。武敏（武俊とあるが全ての系図が武敏としている）が小船で渡ろうとする頼尚軍をその勢三千余騎をもつて撃破してしまうと、この時既に、対岸に居た頼尚はなす術もなく「念ヲ推テ」尊氏の下に馳せ参じるといのである。しかし「菊池勤王史」も指摘するように梅松論では二月二十五日に頼尚が赤間関で尊氏を迎えているのであるから、二十七日にはまだ大田清水で戦っていたはずの武敏が頼尚を攻撃することは不可能である（1）。又、地理的にも肥後を発した武敏軍が太宰府を占領する前に、太宰府から長門への通路を遮断出来るはずがない。更に、梅松論には足利軍が芦屋に着いた日の暁、頼尚の留守を守る父妙恵が武敏軍に敗れて自害したと書かれている。即ち、この場合、梅松論に述べる如く、武敏は頼尚が長門へ尊氏を出迎えに出陣後、その

留守を攻めたと見るべきであり、太平記の記述は誤っている。この菊池と小式の戦いは、太平記に「二月二十八日九日兩日」続き、妙恵が「二月三十日討死自害」したように書いているが、詫磨文書（1）によれば二月二十九日一日で有智山合戦は終わっている。又、延元元年二月は小の月であるので三十日という日はなかった。このあたり梅松論の日付は一日ずつずれているようである（2）。妙恵が自害するまでの経緯を太平記には、小式方から俄に心変わりをして一族が出て妙恵に向って菊池軍への降服を誘いかけるが、むしろ「死シテ名ヲ殘サンニハ不_レ如」と自害する、と簡略に記す。これに対し梅松論では、尊氏軍の為に備えておいた馬具等を灰燼となし、かつ合戦に討負け面目を失ったことを恥じ入り、わが子頼尚を始め一族郎党に「心を一にして忠節を盡して將軍を御代に付奉るべし」と遺言を残すまでを詳細に描き出す。このように太平記よりはるかに多くのスペースを妙恵の合戦次第に費したのは、梅松論が足利氏に属すると思われる作者によって書かれたものである為、太平記とは対照的に將軍方に描写の焦点をおいていることに原因すると思われる。又妙恵自害の噂が尊氏の耳にも入り、その実否を正した時、頼尚が合戦前に軍勢の士氣喪失を恐れて虚説だと答えたという逸話が梅松論のみに記され、太平記に見られないのも同じ理由であろう。

多々良浜の合戦は三月三日である。

將軍ハ香椎宮ニ取與テ、遙ニ菊池ガ勢ヲ見給フニ、四五萬騎モ有
ラント覺敷ク、御方ハ纔ニ三百騎ニハ過ズ。而モ半ハ馬ニモ乗ズ
鎧ヲモ著ズ（太平記）

この軍勢（3）の差は梅松論においてさらに「敵は……其勢六萬余騎、御方……都合御勢千騎には過ぎざりける」とひらく。戦勝に勢い上る菊池軍と意氣消沈の足利軍とでは、単に兵馬の数だけでなく士氣そのものにかなりの差があった。それは、郎党のみならず、尊氏においてすらその感が深い。太平記には軍勢の差に圧倒され「云甲斐ナキ敵ニ合シヨリハ腹ヲ

切シ」と意気沮喪して自害すら思い立つ尊氏に、弟直義が「合戦ノ勝負ハ、必モ大勢小勢ニ依ベカラズ。……此三百騎志ヲ同スル程ナラバ、ナドカ敵ヲ追拂ハデ候ベキ。御自害ノ事會テ有ベカラズ……。」と激励する場面が描かれる。ここにわれわれは尊氏の弱気な一面を見るのである。足利時代の基礎を作り、初代將軍として歴史上大きな足跡を残した尊氏は、世の英雄のほとんどがそうであるように、その事蹟故に後世の人々に過大視され、絶対化されて来た傾向がなかったろうか。南朝方から見る時賊軍の総大将と見なされ、又、征夷大將軍の名をほしいままにする時、並はずれの積極果敢な人物と評価されがちであるが、太平記作者の描き出した尊氏からはもっと血の通った一人の人間としての人物像を読みとることが出来るのである。このような尊氏像は太平記の随所で見出し得る。巻十四「矢矧・鷲坂・手超河原闘争」の尊氏は義貞軍に敗れ建長寺で出家しようとしては直義の謀書で辛じて思い留まる。同じ巻の「將軍入洛事附親光討死事」では、新田軍を追いつけて、京都に入った尊氏が、持明院の法皇・儲王、儲君が一人残らず山門へ御幸している状態を見て「將軍自ラ萬機ノ政ヲシ給ハン事モ叶フマジ、天下ノ事如何スベキト案ジ煩フテ」自信を失いかけた不安な心理を露見させ、他に巻二十九「松岡城周章事」の自害決意は右の場合のように弱気なものではなく武士道精神の発露ともいえるものであるが、弟直義軍との戦いに敗れて松岡城から次々と郎党が落ちて行った後に「サテハ世ノ中今夜ヲ限りゴザンナレ、面々ニ其用意有ベシ」と自刃の前の酒盛を始めるのである（この場合は、饗庭命鶴丸の計略により自害を思いとどまる）。更には尊氏が、如何に禅宗を保護したかについては夢想國師、天龍寺建立とに係わる記述から充分に察せられる。梅松論が尊氏方の作者によって書かれた作品であるにも拘わらず、太平記に描かれた尊氏像の方に、より印象深いものを感じるのも、右に見た如く太平記作者が、尊氏を英雄として評価する前に、一人の人間として描こうとしているからに他ならない。

多々良浜の合戦が始まらんとする時、太平記は、尊氏方に一つの吉兆

が現われたことを記す。香椎宮の前を過ぎようとした時、直義の甲の上に鳥一番が杉の葉を落して行くと、これを香椎宮の擁護する瑞相と見るのである。同様のことを梅松論に求めると、少々趣を異にするものの、やはり香椎宮の前を通過する時神人等が差出した杉の枝を足利軍の笠印にする話がある。両者を比較してみると、ここでも太平記の吉兆は創作されたものと思われる。何故なら、梅松論にもあるように、香椎とは神皇功后が椎木に手を触れたことに由来する神社で、椎木をもって神体とし、杉の木をもって御室としており、ここを通過する足利の笠印がそれと同じ杉の葉であること、結果として小勢の足利軍が多勢の菊池軍に打勝ったことなどから次第に因果的にその勝因を創作したものと思われるのである（吉兆については既に「菊池合戦事」の中で述べた通りである）。

戦果は吉兆の如くなっていく。尊氏にとってこの一戦は足利再興の転機となる誠に意義あるものとなったが、それだけに、梅松論のこの部分の記述は太平記のそれよりはるかに詳細を極める。武敏軍の敗因を求めると太平記には(一)兩軍相対し未だ兵刃を交えない時、拔駆けする者が出て戦意が乱れたこと、(二)松浦、神田の者共が足利軍を多勢だと思い込み降人になったことをあげているが、(三)については梅松論で頼尚が「敵は大勢にて候へ共、皆味方に参るべき者共なり。菊池計は三百騎には過ぐべからず。」といっているところから、菊池軍は俄仕立の軍勢で合戦前から足利軍へ寝返りを打つことが十分予測出来たものと思われる。又、勝負を決した原因の一つとして「折節、北風塵砂を吹き上げ」（梅松論）の記録も注目し得る。多々良浜は東に平野、西から南へかけての松原、南に博多湾、北に丘陵を望む地形にあり、合戦に望み足利軍は丘陵部に陣を構えていた。従って風下の菊池軍にはかなり不利だったと思われる。更には、菊池軍は太宰府・有智山の合戦以後休息する暇もない連戦で、かなり疲労していたことも想像される。

武敏は敗色濃厚と見るや、菊池軍勢を率いて肥後へ引返す。尊氏は一色道猷と仁木義長を両大将として菊池攻撃に向わしめる。太平記による

と、最初「菊池ガ城」を責め、次で「八代ノ城」から内河彦三郎を追落す。又、阿蘇大宮司八郎惟直を小杵山で自害せしめ、その弟九郎は農夫の手で生捕り、秋月備後守は太宰府で討たれ、九州の勢力地図は完全に足利勢の下に塗りかえられるに至る。この「菊池ガ城」の所在地は不明だが、菊池氏の居城ではなく、福岡県の三原城ではなからうかとの説もある⁽⁴⁾。又、菊池氏と最も係わりの深かった阿蘇氏の惟直、その弟九郎については阿蘇氏系図にこの名前を見ることが出来るが、惟成は生捕られたのではなく惟直と共に死んだものと思われる⁽⁵⁾。尚、武敏が以後、一色軍に追われながらも常に九州の天皇方の中心として屈することなく各地を転戦する⁽⁶⁾。うちに京都より武重が逃げ帰ってくるのである。

以上の合戦について、菊池武朝申状の記録は簡略である。

於^ニ鎮西^ニ者在國之一族等。致^ニ妙惠謀代之大功^一。於^ニ多々良濱^ニ合戦。勵^ニ武節^ニ畢。

ここには武敏の名前すら見出すことは出来ない。敗戦に終わったこの合戦は菊池にとって不名誉なことであり、あえて記録にとどめようとしなかった意図が伺える。

かくて、武敏の率いる菊池軍にとっては敗北であり、足利勢にとっては再興の大きな足固めとなったこの「多々良浜合戦事」を太平記作者は次の如く述懐するのである。

天運時至ザレバ加様ニ皆滅サレニケリ。爾ヨリ後ハ九國、二嶋、悉將軍ニ付順奉ズト云者ナシ。此全ク菊池ガ不覺ニモ非ズ、又直義朝臣ノ謀ニモ依ラズ、帝・將軍天下ノ主ト成給フベキ過去ノ善因催シテ、靈神擁護ノ威ヲ加ヘ給シカバ、不慮ニ勝コトヲ得テ一時ニ靡キ順ケリ。

ここには太平記の作者が、例え南朝方に同情的立場をとっていたにせよ、勝利者と敗北者を一樣にとらえようとした中世時代特有の運命観、因果観がある。それは、一人の力ではどうすることも出来ないような変転極らない現実をいやおうなく見せつけられた作者が、現実を現実として容認して行こうとした姿に他ならない。梅松論の作者が足利軍の勝利を神の加護と思う一方、尊氏の武略を誉め、頼尚の謀を忠とし、尊氏の立場に立つあまり微視的な記述に陥ってしまったのとは対照的な態度とすべきであろう。

註

- (1) 詫磨文書貞政申状(抜萃)(肥後文献叢書卷三)
一、建武三年二月二十七日筑後國大田清水合戦之時致合戦軍忠候畢
一、建武三年二月二十九日菊池掃部助武敏以下凶徒等寄來宰府之間筑前國有智山合戦之時若黨三郎次郎討死候畢。
- (2) 平泉澄氏「菊池勤王史」を参照。
- (3) 参考太平記「今川家、毛利家、北條家、南都、天正本、作五百、下做之」
- (4) 平泉澄氏「菊池勤王史」は松浦斑島文書、有志文書に三月十一日激戦のあった記録が残っているところから、三原山を推定する。
- (5) 新撰事蹟通考卷之六。「三月二日己酉戰^ニ多々良濱^ニ不^レ克阿蘇大宮司惟直及弟惟成走^ニ肥前小城郡^ニ終於天山^ニ自刃^一。
- (6) 小代文書(熊本県史料中世篇第一)

五 むすび

以上述べた如く、太平記に登場した武時、武重、武敏に代表される菊池氏の行動は、それぞれ大筋において史実と一致していることがわかった。と同時に、「筑紫合戦事」における櫛田神社の怪異や武時親子の訣別場面、「多々良浜合戦事」における香椎宮の奇瑞など、史実を離れ、創作された部分も極めて多かった。即ち、ここでも太平記作者は種々の文献史料を参考にし、かつ、巷間の噂にまで耳を傾けつつも、それを単なる記録として書きとどめるのみならず、史実の骨組をフィクションの糸で結ぶことによって一種の歴史的文学にまで発展せしめているのである。

る。

ところで、太平記作者は菊池氏をどのように受けとめていたのであろうか。中央においては、多くの地方豪族の中の一族であること以上の評価はなされていなかったように思われる。太平記が武時の武功を高く評価し、又、湊川の正成の自害の際、共に命を絶った武吉を称える一文を記述しているにしても、それだけでは、他の地方豪族よりもぬきんでた評価がなされたことにはならないだろう。更には、武重を武季や武俊と誤記したり、旧形をとどめているといわれる金勝院本に出ている武重の名前が、現存の太平記諸本では抹消されていることなどからも菊池氏の評価の程度が察せられよう。しかし、太平記の舞台がひとたび九州に移るや、菊池を抜きにしては如何なる合戦も語ることが出来ない程、その存在は大きくクロージアップされるのである。同時に、武時、武敏ともに合戦において敗れはしたものの、作者はその敗戦を極めて同情的にとらえようとするのである。これは、菊池氏が終始南朝方であり、太平記の作者も南朝の立場に立つ者であったということもさることながら、太平記が中央、地方の区別なく戦乱期に生きる朝廷人や武将をはじめ、あらゆる人々を巨視的立場に立つて眺め、現実を現実のままにとらえ、そこに人間の生き方を見ようとしたからに他ならない。それ故にこそ一方豪族に過ぎぬ菊池氏が太平記に度々登場することが出来たのである。

武時、武重、武敏はそれぞれ巻十八までをもって太平記から姿を消し、以後しばらく菊池氏の名前を見出すことは出来ない。後半に至り巻三十三、三十六、三十八にはそれぞれ菊池氏に関係する合戦が描かれ、ここでは武光が活躍するのであるが、それについては後日稿を改めたい。

(本大学福岡教養部講師)